

為合歎扇、團團似明月」の用例を引く。

○空観：中村元著の『仏教語大辞典』には、「一切の存在はそれ自体の本性（注1）がなく、固定的に実在するものでないという真理を觀想（注2）する方法。一切の存在を空（実体がない）（注3）と觀（注4）する立場」と説明する。

（注1）常住不変な絶対の眞実性。本来の姿。

（注2）深くおもいをこらすこと。

（注3）①うつろ②もろもろの事物は因縁（注3A）によって生じたものであって、固定的実体がないということ。

（注3A）①原因。②何らかの意味でつながりのある一切のものをいう。④因は結果を招くべき直接の原因。縁は因を助けて結果を生ぜしめる間接の原因。

（注4）真理を觀すること。心静かな清浄な境地で、世界のありのままを正しく眺めること。

石田瑞麿による『例文仏教語大辞典』（P202）では、「一切のものは、ことごとく因縁によって生じたものであって、永遠不変の自我や実体といったものはなく、すべて空であると觀じること」と説明する。

『菅家後集』「506 晚望東山遠寺」に「未得香花親供養、偏將水月苦空觀」の句が見える。

ここでの「空観」は「この世のものはすべて空であるということを観じる」の意味で使用されている。

『漢語大詞典』では「仏教語」「対空諦的觀想、以体認无相為宗。亦指天台宗所立一心三觀（空觀・